

1998年カンヌ国際映画祭監督週間正式出品作品

LE NAIN ROUGE

# リュシアン 赤い小人

1998年ベルギー=フランス合作

監督:イヴァン・ル・モワヌ

主演:ジャン=イヴ・チュアル アニタ・エクバーグ

原作:ミシェル・トゥルニエ

その日彼は愛を知った

愛はボヘミアン

我などにはありはしない

君が愛さなくても僕が愛す

Graphic design and illustration by Aquarax, Uno

DISTRIBUTED BY CABLE HOGUE CO., LTD.

## ちょっと奇妙なベルギーのお伽話

僕は小人さ、泣きたくるほど背が低い  
何より生きることに臆病なのが情けない  
悪夢から抜けだそうにも出口がない  
悩み抜き、考えあぐね、堂々めぐりするばかり  
僕の愚かな人生は孤独と憎しみに満ちていた

そのすべてを、ここで終わらせよう  
僕にも新しい生き方ができるはず  
苦しんだ分だけ喜びがあっという  
許されないと諦めていた生き方を始めよう  
復讐ではなく、今までのあがないとして

新しい目標に向かうには  
生まれて以来避けてきた  
小人である事実を認めることを納得しよう  
胸の奥深く隠してきたものは  
誰の胸の奥にも人知れず潜んでいるものと同じだから



# Le Nain Rouge

リュシアン 赤い小人



### スタッフ

監督：イヴァン・ル・モワヌ  
原作：ミシェル・トゥルニエ  
音楽：アレクセイ・シェリジン、ダニエル・ブランド  
撮影監督：ダニー・イルセン  
美術：フィリップ・グラフ

### 出演

リュシアン・ロット：ジャン＝イヴ・チュアル  
パオラ・ベンドーニ：アンタ・エクバーク  
イジス・コロンプ：ディナ・ゴージ  
座長：ミシェル・ベルロン  
ボブ：アルノ・シュヴリエ

1998年 カンヌ国際映画祭監督週間正式出品作品

1998年 ベルギー＝フランス合作

モノクロ/ヴィスタサイズ (1:1.66) / 102分

配給：ケーブルホグ <http://www.cablehogue.co.jp>

特別協力：ダジュール企画

後援：ベルギー大使館、フランス大使館



今、その動きが目されるベルギー映画界。期待の新人イヴァン・ル・モワヌの初長編作品『リュシアン 赤い小人』は、監督の卓越したビジョンとユーモア、深い優しさに溢れている。98年のカンヌ国際映画祭監督週間での上映を皮切りに、世界各地で行われた50以上の映画祭（エディンバラやベスカラ、ナミュール、キエフ、コペンハーゲンを含む）で数々の賞を受け、注目を集めた。本作はフランスを代表する作家の一人ミシェル・トゥルニエの短編小説がもとになっているが、ル・モワヌ監督は原作を読んですぐに強く惹かれたという。「恋に落ちたようだった。自分自身の話のように思えたんだ。ただ僕の人生はあれほど厳しくはなかったけどな」。

監督は主人公の小人は“人間の条件”についての隠喩であり、我々はみな主人公のような小人を心に閉じ込めていると言う。小人が自分の存在への戸惑いから解放され、尊厳や愛を勝ち得るまでのストーリーを、人々が身近に感じているファンタジーとして伝えている。

——小人は侮辱や悩みとうんざりし、どの人間よりも大きくなりたいと思えるようになる。そして実際に世の中で最も大きくなった時、このまま大きな人間の世界の一部になるより、同じ大きさの愛する者たちに囲まれて、自分自身の国の王子になることを選ぶ。——この映画は平和に帰るということを描いた“ちょっと奇妙なお伽話”なのだ。

### 『赤い小人』ある小人の人生遍歴 柳澤 一博 (映画評論家)

イヴァン・ル・モワヌ監督の『赤い小人』は小人が主人公の異色作である。リュシアン・ロット（ジャン＝イヴ・チュアル）は、三十代で身長1メートル28センチ。黒縁の眼鏡をかけ、真面目で臆病な感じがする。法律事務所で働くリュシアンは人一倍仕事熱心で、同僚たちが帰った後も、たったひとり残業する。ミシェル・トゥルニエの原作によれば、「彼（リュシアン）は離婚問題を専門に扱っていた。自分では結婚など思いも及ばなかったので、仕返しに、他人の仲を裂くことに情熱を燃やしていたのだ」とある。だが、映画ではリュシアンは仕事に歪んだ情熱を抱いているようには描かれていない。また、原作のリュシアンの悪意や憎悪も弱められ、好感の持てる人物になっている。

一方、彼の職場は風刺的に描かれている。法律事務所の経営者は俗悪で偽善的な人物である。また、彼の同僚たちは感情のないロボットのような。がらんとした事務所で黙々と働くリュシアンは、カフカの小説の主人公を思わせる。仕事熱心なリュシアンの人生は、ふたりの人物との出会いによって転機を迎える。ひとりとはサーカスのブランコ乗りの少女イジス（11歳の美少女ディナ・ゴージ）。もうひとりは大柄な年増のオペラ歌手パオラ・ベンドーニ伯爵夫人。パオラを演じるのは、なんと67歳のアンタ・エクバークである。巨体で怪異な容貌のエクバークからは醜悪で退廃的な雰囲気醸成されている。リュシアンはパオラの愛人となり、彼の生活は一変する。彼は派手なスーツを着込み、美容院に通い、パオラに高級品をプレゼントする。職場では彼の態度は次第に横柄となり、ついに会社から解雇される。一方、パオラとの関係は破局を迎え、リュシアンは彼女を殺害する。その後、彼は夜のレストランやバーに出没し、墮落した生活を送る。

リュシアンはパオラとの愛人関係によって退廃的な世界に足を踏み入れるが、そうした世界と対照的なのがイジスの純粋無垢な世界である。イジスは原作には登場しないが、イジスとリュシアンの純粋な関係は爽やかさを感じさせる。何よりもイジスの背丈がリュシアンと同じくらいなのが重要だ。彼女といるとリュシアンは自分が小人であることを忘れることができずに違いない。

最後にリュシアンが辿り着くのは、イジスがいるサーカスの世界である。リュシアンは道化師として人気を博す。サーカスはさまざまな境遇の人間が身を寄せる共同体だ。そこなら小人で殺人者のリュシアンを受け入れることができる。そして、純粋無垢なイジスがいる。イジスと心を通すことができるのは彼も心が純粋な証拠である。このサーカスでのリュシアンは、フェリーニの名作『道』(54)の綱渡りの芸人、キ印（リチャード・ベースハート）を思い出させる。

そう言われてみれば、この映画には「フェリーニの道化師」(70)に縁のある出演者が顔を揃えている。まずアンタ・エクバーク。それから『フェリーニの道化師』にはアニー・フラッターニ（一世を風靡した道化師フラッターニ兄弟の孫娘）が出演していたが、イジス役のディナ・ゴージはアニー・フラッターニのサーカス学校の生徒である。そして老道化師のカルロ・コロンプは一家ともども『道化師』に出演していた。さらに、墮落した主人公と純粋無垢な少女との対比もフェリーニ的である。だが、『赤い小人』のユニークさはひとり小人の人生の惑いを彼に寄り添うようにして描いていることである。リュシアンは、ただ背丈が足りないだけで周囲の人間とまったく同じなのである。孤独や怒り、心のときめき、嫉妬、復讐、墮落、サディズム。リュシアンは小人であるがために劇的な人生遍歴を体験するが、それは誰もが多かれ少なかれ体験することなのである。

12月23日(土)～1月12日(金)ロードショー!!

◎12月23日(土)～29日(金) = 2:15 / 6:15

◎12月30日(土)～1月5日(金) = 1:15 / 5:15

◎1月6日(土)～12日(金) = 2:30 / 6:30

前売鑑賞券¥1400にて好評発売中!! (当日一般¥1700処)

\*ご注意! = 12月31日、1月1日、2日は休館日となります。



ホワイトヒル 梅田泉の広場M・10右とがる南へ5分

扇町ミュージアムスクエア

☎06・6361・0088 www.oms.gr.jp